



平成 30 年度文化庁芸術祭参加公演

WINDS CAFE 262 in 原宿

# 打楽器百花繚乱 V ～旅するヴィブラフォンへの序曲～

Percussion Extraordinaire Vol.5 ～Overture for The Longest Journey～

2018 年 10 月 21 日 (日) 15 時開演 (14 時 40 分開場)

原宿：カーサモーツァルト

## 第一部 静寂

Arief Winanda/シンバルのための独奏曲  
黒田 崇 宏/poco rit...for Vibraphone solo (日本初演)

## 第二部 自然

近藤 浩 平/湖と舟 ～湖北の光と陰～ (世界初演)  
Marin Escande / Villes à travers forêts, forêts à travers villes (日本初演)  
青 柿 将 大/Reverse graffiti for Vibraphone solo (日本初演)

## 第三部 音と人間

原 島 拓 也/ toi t'ou t'ou for percussion solo (世界初演)  
佐原 詩 音/Petorunkamuy  
J.S.バッハ (白藤淳一編曲) /プレリュードとフーガ BWV543(世界初演)  
(マリンバ：小林孝彦、鈴木孝順)  
たかの 舞 俐/Adieu and rebirth (ピアノ：佐原詩音)

## ご挨拶

WINDS CAFE のきっかけは、1996 年に出会った陶芸家の板橋廣美氏から、ご自身がお持ちの吉祥寺のギャラリーで何かやれないかと相談を受けたことにあります。その WINDS GALLERY は地上 7 階、三面ガラス張りです。富士山がみえる絶景の空間でしたので、即座にここでイベントをやりたいと申し出たところ、快諾いただけました。

当初は友人知人に企画を持ちかけ、主にスクリーンを立ててオペラやバレエを見ながら酒を飲んで突っ込みを入れる会だったのですが(笑)、出演者が次の出演者をご紹介くださるご縁が続き、音楽演奏・講義・ワークショップ・演劇と、ジャンル問わずのライブイベントに変貌し、やがてイベントと打ち上げを一緒に行うスタイルができあがっていきました。

諸事情によって WINDS GALLERY が閉鎖された後も、継続を望む声がありに大きく、以降三軒茶屋・下北沢・西荻窪・等々力・四谷・新大久保・板橋・池上と会場を転々と移し、ようやく原宿に定住の地を見出した次第です。

毎月 1 回、一度も休まずに続けてこれたのは、ひとえに企画者・出演者の皆様、会場提供者の方々、そして何よりもご来場いただきました皆様のおかげです。本日の會田君の企画で 262 回目！ あらためて御礼申し上げます。

WINDS CAFE 主宰 川村龍俊  
WINDS CAFE ホームページ  
<http://tatsutoshi.my.coocan.jp/Up.html>

## 會田 瑞 樹 Mizuki AITA

打楽器奏者。1988 年宮城県仙台市生まれ。宮城県仙台第二高等学校を経て武蔵野音楽大学大学院修士課程修了。佐々木祥、星律子、吉原すみれ、神谷百子、有賀誠門、藤本隆文の各氏に師事。学部三年次に日本現代音楽協会主催第九回現代音楽演奏コンクール「競楽IX」において第二位入賞。2014 年 NHK-FM リサイタルノヴァ出演、第四回世田谷区芸術アワード「飛翔」音楽部門受賞。

2016 年 NHK-BS プレミアム「クラシック倶楽部」において會田の演奏を一時間に渡って特集した「打楽器百花繚乱 —Percussion Extraordinaire Mizuki AITA—」全国放送は現代音楽コンテンツの中でも異例の好評を博し再放送が続いている。これまでに 3 枚のアルバム『with...』(朝日新聞推薦盤)『ヴィブラフォンのあるところ』(レコード芸術特選盤)『五線紙上の恋人』(レコード芸術準特選盤)を発表しいずれも高い評価を得た。打楽器のための新しいレパートリーの発展を活動の中心に据え、これまでに 150 作品以上の新作初演を手がけている。

2018 年は藪田翔一氏の新作協奏曲初演を皮切りに、ISCM(国際現代音楽協会)世界音楽の日・北京大会において国枝春恵作品を中国国家交響楽団と共演し再演、7 月には国際交流基金アジアセンター主催事業「Notes」アーティストとしてインドネシアを訪問し自作曲を含む新作初演、東京交響楽団との山内雅弘作曲《SPANDA ヴィブラフォンとオーケストラのための》熱狂的初演は記憶に新しい。10 月にはパリでのソロリサイタル、リトアニアにおいて、聖クリストファー室内管弦楽団と権代敦彦作曲《Sæwol ～海から～ for Vibraphone and String Orchestra》世界初演を行い、本公演は帰国後まもなくの開催となる。

●小林孝彦(こばやし・たかひこ): 埼玉県出身。武蔵野音楽大学卒業及び同大学院修士課程修了。現在はフリーランスのティンパニ・打楽器奏者として、普段はオーケストラを中心に、ときどき吹奏楽、ときどき打楽器アンサンブルを 8:1:1 くらいの割合で行き来している。これまでに、打楽器を安藤芳広、高橋美智子、吉原すみれ、中谷孝哉、宮本典子の各氏に師事。お酒はビール・ワイン・日本酒・焼酎を 3:3:3:1 くらいの割合で行き来している。

●鈴木孝順(すずき・たかゆき): 打楽器・マリンバ奏者。武蔵野音楽大学卒業。2018 年東京国際マリンバコンクール優勝、JILA 音楽コンクール最高位、岐阜国際音楽祭マリンバワン賞、KOBE 国際音楽コンクール優秀賞他受賞多数。足利カンマーオーケスター打楽器奏者。ソリストとして同団と共演。會田瑞樹氏とはリサイタルをはじめ多数共演し、薫陶を受ける。打楽器・マリンバを高橋美智子、神谷百子、岡昭男、高田亮の各氏に師事。

## 第一部 静寂

### Arief Winanda 作曲

### シンバルのための独奏曲(2018)

本楽曲では、うねりのなかに内包される音の循環を表現した。私たちは、はじめにシンバルがたらず音色と大気の振動によって、うごめく音を感じるだろう。その後、音のうねりは一度私たちから遠のくものの、その後再びシンバルの音と共に再び出現する。(Arief Winanda)

インドネシアの新進気鋭の若手アーティスト、アリエフ・ウィナンダは伝統音楽から現代音楽に至るまで幅広い教育を受け、経験を重ねてきた。ダンサー一家に生まれ育った彼は、独自のダンス感覚、芸術的な動き、踊りの哲学を吸収し、それらを制作過程に生かしている。現在はジャカルタ芸術大学で技術を磨いている。

### 黒田 崇 宏 作曲

### poco rit...for Vibraphone solo (2018/日本初演)

ヴィブラフォンのための少し長めのバガテル。

ここ最近、私はヴィブラフォンの弱音が好きになってきており、その嗜好がそのまま作品に反映されています。

この作品は音と音との間隔が徐々に広がっていくという(疑似的なリタルダンドとも言える)アイディアが曲の最初から最後まで通底しており、上記の嗜好徳組み合わさって、静かでやや静的になっています。音の強弱も曲中において弱音からさらに弱い弱音へと向かっていきます。少しずつ伸びていく時間や弱音の変化がどのように空間を変容させていくかも、作曲上の関心の一つです。

また、この作品ではいくつかの鍵盤を洗濯バサミで挟み、約四分音ほどピッチを下げています。これは作曲家の伊藤弘之氏のアイディアで、彼の「まだ見ぬ大地」という打楽器ソロの作品を参考にしたものです。(黒田崇宏)

神奈川県出身。2014年3月に東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業。2017年3月に東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程作曲専攻を修了。これまでに作曲を井元透馬、松下功、福士則夫、近藤謙、鈴木純明の各氏に師事。第29回現音作曲新人賞(2012年)、第37回入野賞(2016年)などを受賞。

## 第二部 自然

### 近藤 浩 平 作曲

### 湖と舟～湖北の光と陰 作品171 (2017/世界初演)

#### 第1楽章 近江塩津、晩秋

#### 第2楽章 余呉湖

#### 第3楽章 赤坂山遠望、海津大崎沖

琵琶湖に沿って北上していくと、とくに晩秋は、寒々とした独特の色彩になっていく。湖面は鈍く弱い光を反射し、北国の冷涼さを感じさせる。湖北の独特の冷涼な北方的な寂寥感は、さらに北へ向かって若狭や越前に出ると不思議と存在しない。若狭や越前には海の暖かさがある。

湖北の海津大崎あたりでは、湖に山が迫る。春には、湖上から斑雪を稜線に置く赤坂山などが見え光に溢れるが、雪解け水は冷たい。

冷涼なのに不思議にまぶしい光に満ちた独特の風土を伝える音楽に、ヴィブラフォンほど適切な楽器があるだろうか。(近藤浩平)

2010年ベルリン・ドイツ・オペラ<Klang der Welt Ostasien>作曲コンクール第2位(室内楽)。左手のピアノ作品は、智内威雄氏、鶴野泉氏による演奏機会が多くベルリン・フィルハーモニー室内楽ホールでも演奏された。「海辺の祈り~震災と原子炉の犠牲者への追悼 作品121」は世界各地で再演100回を越える。「持ち運びできる協奏曲」というコンセプトで作曲された「ヴァイオリンと打楽器の為の協奏曲」は、ブダペスト祝祭管弦楽団の日曜室内楽コンサートシリーズでも取り上げられた。2016年にはアリゾナ州にて5日間にわたるKondo Festivalが開催された。ギター、ピアノ、ヴィオラなどの協奏曲、オーケストラ作品、室内楽、歌曲、リコーダー作品、野村誠氏の委嘱による鍵盤ハーモニカの為の作品もある。http://koheikondo.com

### Marin Escande 作曲

### Villes à travers forêts, fôrets à travers villes (2018/日本初演)

クロード・ドビュッシーの「葉ずえを渡る鐘の音」からほぼ1世紀が経過した1998年、トリスタン・ミュライユは「鐘の音を渡る葉ずえ」を作曲しました。環境と、我々の自然との関係が反転したのです。今や都市が森を取り囲むのではなく、森の周囲に都市が存在しています。(マラン・エスカンド)

1992年パリ生まれ。パリ国立高等音楽に作曲を師事。その前に東京藝大に一年半に勉強しました。2016年、Petite formes アコースマティック音楽のコンクールの受賞者である。作曲活動に加え、ソルボンヌ大学で音楽学を勉強している。実験工房についての博士論文を執筆している。

### 青 柿 将 大 作曲/

### Reverse graffiti for Vibraphone solo (2018/日本初演)

1990年代、ストリート・アートの分野において《リバーズ・グラフィティ》が考案されました。これはスプレーや塗料を用いる従来のグラフィティとは異なり、例えば排気ガスで汚れた壁や道路の一部の汚れを高圧洗浄機で除去することでイラストやメッセージを浮き上がらせるものです。本作ではこうした「擦り落とす動作」や「引き算の手法」に基づき、10分ほどのキャンバスにやや即興的な身振りを伴う「音のリバーズ・グラフィティ」を描いてみようと思いました。

曲は2部に分かれ、通常「音板を叩く」ことによって音を発する楽器であるヴィブラフォンの、「音板以外をも擦る」という行為に主眼が置かれている前半に対し、後半ではグリッサンドやパッセージの連続、高速でフラッシュバックするような前半の音像の断片といった情報の記録の一部を時折手の平を用いて文字通り除去していく、減算的手法が施されています。(青柿将大)

1991年埼玉生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部作曲科を首席で卒業。学内にて長谷川良夫賞を受賞。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。2012～13年度明治安田クオリティオブライフ文化財団奨学生。2017年度下期野村財団奨学生。2018年度文化庁新進芸術家海外研修員。2012年奏楽堂日本歌曲コンクール第19回作曲部門一般の部入選。2013年第2回洗足現代音楽作曲コンクールB部門最高位。作曲を尾高惇忠、林達也、野平一郎、ステファノ・ジェルヴァザーニの各氏に師事。現在、パリ国立高等音楽院作曲科第一課程に在籍。

原島拓也 作曲

toi t'ɔɪ tɔ 'i for percussion solo (2018/世界初演)

言葉の力というものは凄まじく、薬にも毒にもなり得る。ゆえに用法用量は守らなければいけない。言霊(ことだま)の存在を考える時に常に思う。今作は、演奏者が「おまじない」の音像が齎す「自己暗示」によって操り人形のようにしていく現象を描いている。「おまじない」の音像は3回繰り返されて、次第に優美な音像になっていくが…

toi "toy" toi

愛らしくも狂気のある独奏作品。(原島拓也)

1993年生まれ。東京都出身。奥多摩在住。作曲家/パフォーマー。上野学園大学短期大学部音楽科器楽専門(フルート)、京都造形芸術大学芸術学部芸術教養学科を経て、現在、桐朋学園大学音楽学部作曲専攻3年次研究生。これまでにフルートを高野成之、青木三木栄、田中涼二の各氏に師事。作曲を福士則夫、金子仁美、山内雅弘、山根明季子の各氏に師事。琵琶を水藤桜子氏(錦びわ宗家三代目)に師事。第33回 現音作曲新人賞に於いて『極彩ドロップ No.2』(中掉三味線と十七絃箏とフルートのための)入選。第9回 JFC 作曲賞に於いて『寓話万華鏡』(クラリネットと琵琶のための)入選。第40回 作曲作品展(桐朋学園主催)に於いて『胡蝶』(バロック・フルートとハープとチェレスタとバリトンと月琴とヴァイオリンとヴィオラとチェロのための明清楽へのオマージュ)上演。現在、東京を拠点に現代音楽や現代美術、作曲や編曲などジャンル問わず活動中。

佐原詩音 作曲

Petorunkamuy(2018)

「Petorunkamuy(ペトルンカムイ)」は、アイヌ語で「川の神」を意味します。アイヌにとってのカムイは、神格を有する霊的知性体で、動植物や自然現象、人工物などあらゆるものにカムイが宿っており、その本来の姿は人間と同じだと考えられています。カムイと人間は互いに支え合い、人間はカムイを創造したりカムイモシリ(神々の世界)へ返還したりすることができるのです。

アイヌの人々は様々なカムイの中でも、美しい自然と豊穡をもたらす肥沃の川を大切に祀り、独自の生活文化を営んできました。川は、頭を海に接し、山奥に尻を向けている生き物で、海から魚(サケやマス)を運ぶのです。

この音楽は、アイヌ神話が口伝されてきた歴史をもとに、それを「遡る」アイヌ観念を想起させる意図を含んでいます。アイヌ語を知らぬ私たちへ向けて、言葉から受け取る事象や概念でなく、音から受け取る言葉の意を表現しました。川は海から始まるという先のアイヌ概念を遡るために「ホルカ(後戻りする)」し、川を山から海へ逆流させ、物語っていきます。

會田瑞樹さんは、ヴィブラフォンと金属打楽器を奏しながら、その音楽性に密となる川に関するアイヌの単語を発します。以下は、曲中に語られるアイヌ語とその訳です。これらの発音や音節は、音色やリズムにも綴られます。

レラ(風)、チカプ(鳥)、ポロワッカ(洪水)、アプト(小雨)、ヌペフ(光)、トゥカプチュップ(太陽)、ルヤンペ(雨)、コロポックル(小人)、ウパシ(雪)、ソー(滝)、ペツ・ナーイ(川)、リム(波)、チュラ(魚)、アイヌモシリ(人間の住む地)、ポッ・ペツ(川)、ノンノ(花)、ペトルンカムイ(川の神)、セコロ オカイ ペ ヘペレ ヤイエユカラ(と、子熊が語りましたとき)

(佐原詩音)

1981年生まれ。石川県金沢市出身。

関西学院大学社会学部社会学部卒業後、商社と災害復興制度研究所勤務を経て、東京藝術大学作曲科に再進学し、2013年に卒業。作曲を夏田昌和、安良岡章夫、福士則夫、鈴木純明の各氏に師事。オーケストラから室内楽、邦楽作品など多くの演奏家から委嘱を受け作編曲を行なっている。2018年5月6日に佐原詩音作曲個展 vol.1「SETI」を開催し好評を得た。「雪国の作曲家シリーズ」「コンサートプラン・クセジュ」代表を務め演奏会企画への造詣も深い。音楽事務所「エトワ」に所属し、ピアニストとしての広範な活動も行なっている。開学在学中にはオーケストラ部に所属しチェロ演奏を行い、現在モアンサンブル・プランはじめ多岐に活動を続けている。音楽教室を主宰し、ピアノ・ソルフェージュ講師として後進の指導に当たっている。理数系講師でもある。

J.S.バッハ 作曲/白藤淳一 編曲

前奏曲とフーガ イ短調; BWV 543

原曲のオルガンの演奏(または録音)は前奏曲も、フーガにおいても、それぞれ下降するモチーフからの様々な展開が時に不協和な響きの色彩を与え、長三和音と短三和音の過度な交替は陶酔を通り越し、酩酊を思わせるほどの異様な瞬間も、時折、薄気味悪い顔を覗かせているような趣です。(考えすぎ?)

このような質感をヴィブラフォン&マリンバの演奏に転写させる事が目的ではありません。演奏者には、むしろ、編曲した私の脳裏に残る印象を塗り変えて頂きたい、とすら願っています。(白藤淳一)

1981年岩手県花巻市出身。岩手大学大学院修了。日本クラリネット協会主催クラリネット作品コンクール入賞。第80回日本音楽コンクール作曲部門入選。2016年岩手県農林水産部からの依頼により「おこめきょうだいの歌」を作曲。ヴィブラフォンのための編曲は、ヘンデル/メヌエット:ト短調、エルガー/エニグマ変奏曲より「ニムロッド」、スクリャービン/5つの前奏曲作品16より第3曲、ベートーヴェン/ピアノソナタ第30番作品109より第3楽章、等がある。

たかの舞例 作曲

Adieu and rebirth(2015)

この作品は、ショパンの有名なプレリュードの引用からはじまりますが、コラージュというわけではなく、当時の私の頭の中になぜかこの曲が浮遊していたからです。曲が進むにつれ、このメロディーから音楽は離れていき、中盤から現れるクラスターは、それまでにあった出来事が本当に現実のことであったかどうか確かめるかのように破壊的に響きます。ピアノの上から下へ、下から上への早いパッセージを経て、クライマックスではヴィブラフォンで最高音のFが連打されます。そのあとが、Rebirthの部分になりますが、この作品の最後に現れる和音は私がこの作品で最も表現したかったことかもしれません。(たかの舞例)

桐朋学園大学作曲科卒業後、国立フライブルク音楽大学大学院でブライアン・ファニハウ教授に、その後ハンブルク音楽大学大学院でジェルジ・リゲティ教授に作曲を師事、1988年修士修了。日本音楽コンクール、入野賞、シュトットガルト州作曲賞など数々の賞を受賞。師ジェルジ・リゲティとの出会いにより、独自のオリジナリティーによる作風を発展、確立。2002年にスウェーデンのBIS社よりリリースされたCD「Women's Paradise」をリリース。ハンブルク州文化庁、在日アメリカ大使館、神奈川文化財団を初め、委嘱作品も多く、作品はミュージック・フロム・ジャパン・フェスティバルなど様々なフェスティバル各地で演奏されている。文化庁特別派遣研修員としてノースウェスタン大学(アメリカ)に客員作曲家として滞在。桐朋学園芸術短期大学、文教大学講師。入野賞審査委員。2008年秋には、BIS社よりフルートコンチェルトがリリースされ、2009年10月には、ルーズヴェルト大学、ニューヨーク大学のComposer Forumでレクチャーを行った。2012年1月にセカンド作品集「LigAlien」がBIS社よりリリース。アメリカCD雑誌「Fanfare」で今年のベスト5にも選ばれた。

2014年よりフェリス女学院大学音楽学部音楽芸術学科准教授。

會 田 瑞 樹  
次 回 公 演 の ご 案 内

お問い合わせ：[mizu.vibraphone@gmail.com](mailto:mizu.vibraphone@gmail.com) 080-6008-1297 (事務局)

2018年12月25日(火)19時開演 杉並公会堂小ホール  
會田瑞樹ヴィブラフォンリサイタル —旅するヴィブラフォン—

八村義夫 ドルチシマ・ミア・ヴィタ

金子仁美 ヴィブラフォンソロのための新作  
(會田瑞樹委嘱作品/2018/世界初演)

中川俊郎 ヴィブラフォンとマリンバソロの新作  
(會田瑞樹委嘱作品/2018/世界初演)

K. H. シュトックハウゼン ヴィブラ・エルーフア

佐原詩音 玉蟲の翅、その結び  
(會田瑞樹献呈作品/2017/日本初演)

間宮芳生 ヴィブラフォンとマリンバのための音楽  
(會田瑞樹委嘱作品/2016)

末吉保雄 西へ(會田瑞樹委嘱作品/2013)

権代敦彦 ヴィブラフォンと弦楽オーケストラのための  
《Sæwol ~海から~》(會田瑞樹委嘱作品/2018/日本初演)  
指揮：須田陽

コンサートマスター：甲斐史子

ヴァイオリン：中澤沙央里 下田詩織 新井貴盛 ほか  
ヴィオラ：迫田圭 ほか チェロ：佐原詩音 ほか コントラバス：村田詩織

2018年10月26日、27日  
「国際交流基金アジアセンター主催事業「Notes」東京・横浜公演」

2018年11月20日(火)19時開演/杉並公会堂小ホール  
「末吉保雄の音楽を聴く会」

2018年12月5日(水)19時開演/東京オペラシティ近江楽堂  
「松平敬×會田瑞樹 シュトックハウゼンとシューベルト ~星と冬の旅~」

2018年12月6,8日/鏡仙会能楽研修所 (東京メトロ「表参道」駅下車)  
「第二回 青山実験工房」  
12月6日(木)18:30 【expt. A】  
「砂の女」内藤明美作曲  
パーカッション:會田瑞樹 舞踏:武内靖彦

12月8日(土)13:30 【expt. C】  
「ブリージング・フィールド」八村義夫作曲  
ピアノ：高橋アキ クラリネット：トーマス・ピアシー フルート：木ノ脇道元 ハープ：篠原和子  
パーカッション：會田瑞樹  
「冬の日・芭蕉讚」湯浅譲二作曲  
ピアノ：高橋アキ クラリネット：トーマス・ピアシー フルート：木ノ脇道元 ハープ：篠原和子  
パーカッション：會田瑞樹